

## 佳作

### 創作組踊「我瀬之子」

伊良波 賢弥

#### 登場人物

米須按司（君親）

糸洲下庫理（米須按司の家臣）

をなじやら（女茶良／米須按司夫人／乙鶴）

真樽（米須按司の娘）

福地大主（米須按司の忠臣）

我瀬之子（米須按司の逆臣）

御茶当真加那（我瀬の御茶道頭）

与那嶺之比屋（我瀬の家臣）

満名下庫理（我瀬の家臣）

きやうきやこ持（我瀬の宴にて）

踊り手一（我瀬の女官）

踊り手二（        "        "        ）

踊り手三（        "        "        ）

間之者（次郎）

後見人（柳躍の籠を持ってくる）

#### あらすじ

#### 第一場 舟遊び・我瀬之子の謀反

米須城の家臣・我瀬之子は米須按司夫人に惚れ、按司を亡き者にす

る為、小渡浜での舟遊び・いさり漁に誘い出し、按司を溺死させる。

## 第二場 夫人の悲しみ・仇討ちの決意

夫を殺された夫人と娘は悲しみに暮れ、いつか仇討ちをしようと考えていた。その頃、米須の忠臣・福地大主と再会を果たし、いよいよ仇討ちの準備を始める。

## 第三場 旅衆の御願の宴

我瀬は九月の旅衆の宴を催していた。そこへ夫人と娘が通りかかった為、すぐさま呼び寄せて、やっと捜し出せたと喜ぶ。夫人は結婚前に新居を建てて欲しいと願い、吉日を選んで材木選びに出掛ける事を約束する。

## 第四場 間の者

これまでの経緯を説明し、村人の心情を表現する。

## 第五場 御材木選び・夫人と娘の仇討ち

当日、我瀬と夫人、娘は山へ登り材木選びをする。夫人が我瀬に酒を振る舞い、酔った我瀬が木を選んでいる最中、夫人と娘が背後から襲いかかり、無事仇討ちを果たす。

## 第六場 按司墓の完成・我瀬の亡霊出現・踊て戻ら

福地大主と再会した際に頼んでいた按司墓の普請が完了した為、福地は夫人と娘に知らせて墓の落成式を執り行う。墓に入った際、突然夫人と娘の前に我瀬の亡霊が出現し、夫人と娘は祈祷代わりに「柳躍」をして亡霊を退治する。無事清められた御墓に安堵し、夫人と娘、福地の三人は喜び合い、落成式を済ませ、踊って戻っていく。

第一場 舟遊び・我瀬之子の謀反

《大主手事》（我瀬之子が橋懸りより出羽）

我瀬之子

「是は我瀬之子である。此の世の中は義理や情けも浅ましい事に、父の赤嶺之比屋は、今帰仁世之主の嫡子として世之主の座を継ぐ筈であったが、行いが悪く我がままかつ凶逆な性格として、城中の者をはじめ、身内からも嫌われて、終いには城を追い出され、父の弟（我瀬の叔父）が城主の座を引き継ぐ事となりました。父・赤嶺は

自分の弟を妬み、殺害しようと企てていましたが、今帰仁世之主（我瀬の祖父）に計画が漏れて、刺し殺されそうになった為、結局、生まれ島から逃れて、島国の南の果て、此の南山の地までやって来たのであります。南山の塩平村に長らく住んだ後、与座村へ引越し、そこで妻を娶って、私が生まれました。私は昼夜を問わず海で釣りをしたり、山に入ったりは猪を狩ったりして自分の思うまま、自由奔放に遊び暮らしておりました。その為か、妻にした

いと思つた女どもは皆、私を狼虎の如く恐れ退け、四十あまりになりましたが未だ妻などおりません。しかし、この前の二月の麦穂御祭で米須按司のをなじやらが お出ましになつた際、私は一目見て心奪われてしまいました。その夫人は、まさに沈魚落雁・羞花閉月の御姿で、才能や器量は人より勝っている為、いつかどうにかして（米須）按司を失せしめ、夫人を我が妻として迎えたいと思っております。その為に按司のもとで家臣としてお仕えしようと思ひ、

陰謀を廻して、米須城の臣下達に、按司を殺す真似をしなければ、お前達を殺すぞと脅したところ、狂者な臣下達は反論せず、それを実行して、私はその場面で按司を助け出し、按司にとって命の恩人となる事が出来ました。今や米須城の高官となつて、浮世を楽々と暮らしております。どうかかして米須按司を亡き者にしたいと思案していた際、今まで私がやってきたいさり漁が思いつき、漁をしている海中で按司を殺害しようと考えっております。私は、今まで培つて

きた泳力がありますから巻き添えにされる事はないでしょう。今日は折しも三月三日の節日ともなれば、漁をするのに最適な日取りです。按司を誘い出して、これからいさり漁に出ようと思います。（橋懸り側に向かって）され、按司加那志。 按司加那志。」

《按司手事》（按司は供・糸洲下庫理を連れて、橋懸りより出羽）

米須按司

「やあやあ、我瀬之子よ。陽も暮れようとしている時間から何の用であろうか。」

我瀬之子

「され、按司加那志。今日は名に立つ三月の三日でございます。春風温和な素晴らしい季節に、雲霧もなく天は晴れ晴れとして、きつと今夜も良い気候であろうと思われまますので、遊舟を兼ねていさり漁に出るのはいかがでしょうか。城中にずっと閉じこもっていれば、外の様子が分かりません。漁は私をご案内致しますので、どうぞご安心下さい。」

米須按司

「あゝ、それは何と素晴らしい考えだ。確かに私は城中ばかりにいて外を知らない。良い機会だから、

遊舟や漁を楽しむ事にしよう。とうとう、急いで海辺に出ようではないか。やあ、糸洲下庫理よ。急いで漁の道具を用意してきなさい。」

糸洲下庫理 「拝み留めやべて」

（糸洲は橋懸りより奥へ入り、奥から櫂・投げ網・魚籠・炬を持ってくる）

糸洲下庫理 「され、按司加那志、ご用意致しました。」

米須按司 「できた、できた。」

（道具は我瀬之子が持つ。糸洲は橋懸りより入羽）

米須按司 「やあ、我瀬之子、漁の支度は完了した。群がっている魚が逃げたしまわぬ内に、浜へ降りようではないか。」

我瀬之子 「拝み留めやべて。ご案内致します。」

《按司手事》（按司と我瀬は舞台を一周する）

我瀬之子 「され、按司加那志。小渡浜に着きました。舟に乗って、あそこに見える鍋小堀に参りましょう。鍋小堀は魚が多く群がっている楽園であります。さあ、お急ぎ此の舟にお乗り下さい。」

米須按司

「話を聞くだけでも、心が弾んでくる。今日は波風も立たぬ仲春の穏やかな時季、四方の景色も、いと面白い事よ。浜に出て漁をして遊ぶ事がとても楽しみである。さあ、急ごう、急ごう。」

《伊計離節》（我瀬は櫂を操り、舟を進める）

御舟よ漕ぎ進め御風のまにまに流れゆく先や小渡の小堀

我瀬之子

「され、鍋小堀に到着致しました。

按司加那志、どうぞ御支度をなさ

さって下さい。」

米須按司

「とうとう、急いで支度を始めよう。」

（按司は足袋を脱いで裸足になり、魚籠を腰に取り付ける）

我瀬之子

「され、此の網を用いて、多くの

魚をお取りになって下さい。」

米須按司

「目を凝らしてみれば、魚の影が

多く見える。いざ、網を打ってやろう。」

《仲村渠節》（按司は投げ網を肩に担ぎ、網打ち踊をし、側で我瀬が炬を持つていさり火を照らす。歌の冒頭では、我瀬が按司の側で網の投げ方を教える。その後、按司が一人で漁をしている間に我瀬は按司を討つ機会を覗う）

小渡の鍋小堀 網打ちが行かば 物よ思詰めれ 御潮のすみか

（我瀬は刀を出して、按司の背後から襲いかかる）

我瀬之子

「いや、お前に似合わぬ夫人をよこせ」

《三線列弾》（按司と我瀬はジャンジャンの音とともに橋懸りへ）

第二場 夫人の悲しみ・仇討ちの決意

《子持節（本調子）》（花笠に杖を持った夫人と娘が橋懸りより出羽・舞台一周）

誠かや実か 按司添御隠れや 目元暗々と なるが心気

をなじやら 「哀れ知りめしやうれ今出ぢる二一

人や 島尻米須按司の妻・乙鶴、娘・

真樽であります。恐ろしい事に

夫・米須按司添は、去る三月の三

日に信頼を寄せていた家臣・我瀬にいさり漁に誘われて、その誘いを受け入れたがゆえに、漁の最中、刀で斬りつけられて、海中に落とされて帰らぬ人となってしまいました。実を言くと私は、あのいさり漁の前夜、我が按司添の御守り刀が二つに折られ、舟が難破して按司添が海に沈んでいく夢を見て、これは物知らせ（予兆）であると思ひ、一大事な事になると案じ、当日按司添の外出を必死に止めようとしたのですが、按司添は私の声に耳を貸さず、我瀬との



約束であるからと言って、そのま  
ま漁へ出てしまいました。あの時、  
私がどんなに強引にでも外出を引  
き止めておけばと、悔しく、口惜  
しく、残念で、毎晩泣き明かして  
暮らしております。聞くところに  
よれば、憎き我瀬の奴は、私の事  
を捜しているようで、今にも我瀬  
の家臣に見つけ出されそうなの  
で、私は此の塩平村まで逃れて、  
今はその村の宿の主人に匿っても  
らっております。いつか必ず按司  
添の仇をこの手で討ち取ろうと考  
え、朝夕打ち語らいしております

が、何せ女身二人、敵の強暴さに  
比べれば我々は小蝶のようであり  
ますから、その仇討ちの手段に悩  
み、困り果てております。娘は謀  
に悩んだときは神仏への祈願がよ  
ろしいでしょうと言うので、いず  
れ仇討ちが成功できるようにと、  
体を清めて山々寺々、観音菩薩や  
弁財天、八幡大菩薩など神仏に祈  
願をしている次第です。今日は愛  
宕権現に祈る為、この山道を歩ん  
で参りました。やあ、真樽よ。落  
ちる露涙も押し払い払って、神仏  
に手を合わせ、祈願致しましょう。」

真樽

「仰る通り、すぎし父親・按司添の仇討ちの為に神仏へ祈願致しますよう。」

（夫人と娘は座って、正面に向かって合掌）

をなじやら

「され、あゝ尊と、愛宕権現様。

どうか我々旧米須城の者どもをお守り下さい。」

（祈願を終える）

真樽

「やあ、母親よ。私達の願いが神仏に届く事を願うばかりです。」

をなじやら

「やあ、真樽。無事に祈願を済ま

せた事ですから、またも忍んで山道を歩み進めましょう。」

《長金武節》（夫人と娘は舞台一周）

山々よ越えて こびれ道歩で 千手観音に 八幡の菩薩 思なし子  
ともに 愛宕まで拝で たんで神仏 助け給うれ

真樽

「やあ、母親よ。深山を分け入って、山登りをしたら、足もとが病んで、これ以上歩けません。どうかこの辺りでしたら休ませて下さい。」

をなじやら

「足もとが痛いのであれば、仕方がありません。この辺りで少し休む事に致しましょう。」（夫人と娘

は舞台上手側に座る)

(無音で、編笠と杖を持った福地大主が橋懸りより出羽)

福地大主

「是は福地大主である。悲しい事に我が君親・米須世之按司は、浅はかな我瀬之子という逆臣によって殺されてしまいました。私は按司と命をともにする覚悟で常日頃お仕えしておりましたが、南山王に拝謁していた折、このような謀反が起こった事を知り、とても口惜しく、今なお生きた心地が致しません。今も生きながらえている米須臣下の中には自害した者もい

ますが、中には遠く山原までも逃亡したり、我瀬に仕えたりする不忠な輩がいて、同じ家臣であったのかと思うと残念でなりません。私も今なお命ある身ではありませんが、必ずや悪逆無道な我瀬に対し、すぐにでも刑罰を下さなくてはならないと思い、自害はせず、仇討ちの機会を覗っております。聞くところによれば我瀬は米須按司のをなじやらの前を狙っているようですが、をなじやらは今も行方が分からず、とても心配でなりません。先ずをなじやらを探して、

お守りし、それから散り散りに  
なつたうちの忠心ある臣下達を集  
めて仇討ちをしようと思ってお  
ります。さあ、編笠に顔を隠し、杖  
を手にして島々里々を巡り、をな  
じやら、臣下達を探しに、忍び忍  
んで参りましょう。」

《道行口説噺子》（福地大主による道行踊り）

一、昔豊かな米須村 御代の変われれば地獄なて 苦しや諸臣下民百  
姓

（噺子）風水よたしやる 米須照る島 とよむ御城 按司や無情な  
我瀬のまやあに 殺されめしやうち 恩義忘れる 不忠な輩は 遠く  
北山 将又我瀬仕え 今や我が村 毛作り実らず ねらひの神々 御

怒りだやべる 神も崇めず 民の請願 背いてばかりの 我瀬のまや  
あは 畜生悪君 苦しや民衆の 嘆き様々

二、島を離れて東方 笠に面を隠してぞ 山や里々忍で行く

（噺子）まこと世の恥 命ある事 頂く余生は すぎし君親 仇討つ  
まで 有りし様変え 深く編み笠 面を隠して 村の村々 里の里々  
忍び忍んで 山々歩めば あれに見ゆるは 糸数城か

三、まこと乱れ世恐ろしき 此処やあの城燃え上がる 戦凌いで走  
り行く

（噺子）これぞ地獄の 戦世だやべる 御門さな立派な 世間に名  
に立つ 糸数城は 大力無双な 糸数忠臣 比嘉の留守中 真和志上  
間の 按司べに討たれて 城や大火に 行く手阻まれ よたしやる城  
も 一時で転落 恐ろし乱れ世 あの城この城 炎に包まれ 我は道

中 急ぎ急ぎで をなじやら思子 尋めて探して 戦火混乱 すぐに  
助けな

四、蛇の蝮局も気に留めず いづこ分からぬ山道に 迷ふ我が身は  
闇の中

（囃子）杖をつく毎 はぶの蝮局に 山猪気配は 長旅疲れに 気にも留まらず 迫坂歩みて 木々に覆わる 山々嶽々 いづこ分からず 彷徨う我が身の 露のはかなさ

五、さても御寺の仮枕 唱鶏の声聞くつとめてに 夜明け御太陽よ  
見上げれば 此処に見ゆるは八重瀬嶽

（囃子）夢か現か 気付かぬ我が身は 寝覚め起き出で 見れば寺中  
長老御慈悲に 果報だやべる 御寺の籠中 二揚げ三下げ 声色豊かな 唱鶏の鳴き声 姿かたちに 吹き上げちらしと 声止め声長

げ いづれも見事な したり唱鶏よ さても暁 東を臨めば あれに  
見ゆるは 名高き火山 八重瀬嶽さめ 勇み勇みて またも歩まな

（かぎやで風節で） 長旅の歩み 我肝締めて

福地大主 「気が付けば八重瀬嶽の西側まで

到着していた。山々を分け入り、  
川々を越えて、をなじやらとおめ  
なりべ、旧臣下達を急いで探そうぞ。」

（福地は夫人と娘を見つける）

福地大主 「やあやあ、このような山道に女

身二人が座り込んで、どうした事  
か。」

をなじやら

「此の二人は首里方の者でありま  
すが、道とめて、とめて…」

福地大主

「やあ、をなじやらの前、おめな  
りべの前よ。米須旧臣下・福地で  
ございます。」

をなじやら

「やあ、福地大主」

《アーキー（東江節）》（福地は夫人・娘と目を合わせながら、ゆっくり  
座る）

あゝけ夢がやよら

福地大主

「され、をなじやらの前、おめな  
りべの前。よくぞご無事で生きて  
いらっしやました。もしかすると、

我瀬に見つかって、捕らえられて  
しまったのではないかと、大変心  
配しておりました。今のお二人の  
お姿を見て私は安心し、袖に涙を  
濡らすばかりでございます。」

をなじやら

「やあ大主よ。按司添の不仕合せ  
は言い尽くせないものです。家臣  
の者達は皆散り散りになってしま  
い、ある者は遠く北山までも逃げ  
ていったと聞いております。あな  
たは、そのような戦乱の中、此の  
地（南山）に居続けて、よくぞ生  
きていて下さいました。きっと主  
君への忠心を忘れないでいてくれ

た事でしょう。まさに諸臣下の手本であります。私はいつか、どうにかしてこの手で君親の仇を討ち取ろうと、機会を覗っておりますが、何せ女身なので力及ばず、困り果てております。どうか大主よ、私に武術・太刀打ちをご指南していただけませんか。」

「恐れながら、をなじやらの前、それはあまりに危険すぎます。女身二人であのような暴力者に立ち向かったとしても、到底かないません。このような仇討ちは死に後れた我等家臣どものお役目です。」

福地大主

どうか、ご自分の手で仇を討つ計画などお止め下さい。」

をなじやら

「やあ大主よ。私の為に按司は殺されてしまったのだから、その仇を討つのは私の役目であります。恩義忘却の憎い我瀬を必ず自分の手で討ち取りたいのです。もし私に仇討ちできないのであれば、ここで自害した方がましです。」

（太鼓を打つ↓福地は手を前に出して自害を制止させようとする）

真樽

「やあ、大主よ。あなたに忠心があつて、家臣達の手で君親の仇討

ちを果たそうとする強い御気持ち  
は十分に承知しています。しかし、  
私達母子はこれまで多くの祈禱を  
重ね、仇討ちに備えてきました。  
どうか母と私の思いをくみ取って  
下さい。」

福地大主

「あゝ、何と意志の強いお二人だ。  
ならば、武術ではなく知恵を使っ  
て戦うのはいかがでしょうか。我  
瀬のもとへ行けば、きっと結婚を  
迫る筈でしょう。その時、我瀬と  
婚姻の契りを交わす前に、新築の  
二人の家を建てようと言って、御  
材木探しに山へ登るのです。そこ

で我瀬が木の高さや太さを測って  
いる間に後ろから我瀬の手の甲に  
鑿を刺せば、動けなくなつて我瀬  
も抵抗する事は出来ないでしょ  
う。この計画は慎重にやればきっ  
と成功すると思います。」

をなじやら・真樽 「あゝ、尊と。」

をなじやら 「それは大変素晴らしい計画です

ね。これで行くやく仇討ちが実現  
できそうです。それと、一つお願  
いがあるのですが、あなたに按司  
墓を造っていただきたいのです。  
按司のご遺体は、鍋小堀にあると  
聞き、親ふじへの忠孝のためにと、



娘と二人で渡ったのですが、どうしても探し出せず、ただ波音が切々と高く聞こえるだけでありました。もしかしたら寄せ来る波潮に浮かんでいるのではないかと、二人で按司の名を連呼し続けておりましたが、やはり波音の聞こえるだけで、悲嘆に暮れてしまい、結局その鍋小堀の石や砂を持って帰りました。それを按司の遺体として厨子甕にいれて、米須城の麓に立派で後の代までも残されるような按司墓を造っていただきたいのです。私は、あなたほ

福地大主

ど主人に忠を尽くした者はいないと確信し、お願いしております。「され、をなじやらの前。恐れ多くはありますが、大変名誉で嬉しく思います。直ぐに石大工を呼んで立派な按司墓をお造り致しましょう。」

をなじやら

「そのお言葉が聞けて何よりです。これで私も心配事なく仇討ちに挑めます。とうとう、吉日を選び、日を定めて我瀬のもとへ近づいてみましょう。」

福地大主

「十分お気を付け下さい。我瀬はどんな事をしてくるか見当もつ

かない奴ですから、少しの油断も命取りです。細かい言動にもお気を付け下さい。」

をなじやら

「殺されてしまった按司の無念を晴らす為、我が手の内で仇を討ち取りましょう。さあ真樽、いよいよ仇討ちの用意を致しましょう。」  
「亡き父親の為、長い間の無念であつた憎き我瀬を討ち取る用意を致しましょう。」

真樽

《七尺節》（夫人と娘は立ち上がって北表へ入羽／福地大主は南表へ入羽）

念願の仇 按司の為やれば 勇み立ち出でて 敵の元に

### 第三場 旅衆の御願の宴

《按司手事》（我瀬一行橋懸りより出羽）

我瀬之子

「思っていた事、願っていた事を

先ず一つ叶える事が出来、米須按司を海中に沈める計画を成功させた。米須の臣下も私に逆らうこと無く、散り散りに何処かへ消え失せてしまったようだ。私の願いはただ一つで、米須按司のをなじやらを私の妻として迎え入れたい一心である。家臣達に島々里々を巡らせて、搜索を命じているが、役

立たずの家臣達よ、一向に見つか  
りはしない。私は毎日寝食も落ち  
着かず、気持ちが高ぶっている。  
今日は名に立つ九月一日の旅衆の  
御願の節日ともなれば、天気も良  
好、風も涼しい。そこで家臣の進  
言により、私の心を落ち着かせ、  
景気をつける為にも、盛大に宴を  
開きたい。城のあさなに登って夜  
空を見上げると、今日は朔日であ  
る為、星の光が弱まっている。そ  
のような中で唯一、唐船道星（七  
つ星／北斗七星）がきらきらと輝  
いている事は大変風情があるでは

ないか。中山の泰期を皮切りに三  
山から多くの人々が貿易の為、唐  
国に渡っている。今年も九月にな  
り北風が吹き始めてきたので、使  
者達の出発も間もなくであろう。  
多くの旅人の無事を祈りつつ、酒  
肴・四ツ献を揃え、城内の女官達  
を多く集めて鼓を打ち鳴らし、歌  
や踊りにうみはまで、色々の戯れ  
に一夜を明かそう。やあやあ臣下  
達よ、九月の宴、大いに遊ぼうで  
はないか。」

臣下一同

「拝み留めやべて」

（一同は上手側に一列で座る）

（一同が腰掛けて後、胡弓で「だんぢよ嘉例吉」の演奏を始める）

我瀬之子

「やあ、御茶当真加那よ。今日の

折目にふさわしい特別な御茶を用意しなさい。」

御茶当真加那

「拝み留めやべて」

（真加那は按司の御前に座り、御茶と茶菓子の用意をする）

御茶当真加那

「され、按司加那志。今日は唐国

の半山という御茶をご用意致しました。御茶菓子も唐国から取り寄せた物で、汀砂餡という香り豊かな菓子でございます。まず先に、

我瀬之子

御茶菓子から召し上がって下さい。」

「あゝ、赤粉で華やかに彩り、何と美しい菓子よ。とう、一つ食べてみよう。」

（我瀬は茶菓子の膳を手に取り、汀砂餡を食べる）

我瀬之子

「見た目にも勝る香り豊かな絶品である。誠に唐国の品々はどれも誂え物のように立派であるよ。とうとう、御茶を飲もうではないか。」

御茶当真加那

「され、半山茶でございます。」

（真加那は御茶を注いで、我瀬之子に差し上げる）

我瀬之子

「あゝ、濃くふかされた香り高い唐茶である事よ。澄み渡る御茶の味は城の繁栄を予感させる。とう、  
またも飲もう。」

（真加那が御茶を注ぐ）

御茶当真加那

「され、按司加那志。」

（真加那が御茶を差し上げ、我瀬が二杯目を飲む）

我瀬之子

「したり、真加那よ。御茶の味は此の上なく芳潤であった。今日

の佳き日にふさわしい茶菓を味わった。とても満足である。」

（真加那は一礼して、茶菓の御膳を持って元の所へ戻り座る／胡弓の演奏を終える）

我瀬之子

「やあ、与那嶺之比屋。仕込んである歌踊りの数々、披露しなさい。」

与那嶺之比屋

「拝み留めやべて。やあ、女官達よ仕込んである踊りを按司様の御前でお見せしなさい。」

（女官達は一礼して、舞台中央に出て四つ竹を取り出し、踊り始める）

《真福地のはいちやう節》

一、だんぢよ嘉例吉や 選で指し召せる 御船の綱とれば 風やまとも

二、青柳におもと 糸の縁結で 虎のかけ走りに 往ぢやり来きやり

我瀬之子

「あゝ、出来た出来た。踊る姿の美しさに、より一層宴が盛り上がる事よ。臣下の者どもも今日の佳かる日に思う存分遊び給え。」

（夫人と娘は塩と杓の入った籠を持って、橋懸りより出羽）

をなじやら

「今こそ我瀬に近づく時であります。しょう。塩売り姿に身をやつし、

我瀬の城元を目指して歩いてまいりました。塩作りはその昔、北山の天底村に流れ着いた大和の僧侶が伝えたのが始まりだとされ、我部の塩屋は、大変塩作りの盛んな所だと聞いております。その我部の製塩法を受け継いだ北山の旧家臣達を作る塩平村の塩は大変美味で、希少な物でありますから島々里々を巡り歩いていけば、皆欲しがって私達に寄ってきます。塩が

一番大切な食べ物という証です。  
やあ、真樽よ。民衆の信頼も集めた事でありますから、この絶好の機会に長き日の願いであった仇討ちに挑みましょう。我瀬の城元も、もう間近であります。肝を引き締め、油断するな。」

真樽  
「やあ、母親よ。慎重に我瀬のもとへ近づいていきましょう。」

《中城はんた前節》（夫人と娘の道行の踊り）

親子真塩売りに 思はまて居れば 太陽や入り下げて 夜になよさ

我瀬之子 「あれを見れよ、見れよ。籠を担

いだ物売り姿の乙鶴にも似た美しい女と娘が、城下の道を歩いているではないか。やあ、満名下庫理、急いで引き止めて、急いで呼び止めて、城内に女を連れてきなさい。」

満名下庫理 「拝み留めやべて」

満名下庫理 「やあやあ、物売りの女。按司加那志前がお呼びである。急いで城内へ入って、按司を拝みなさい。」

をなじやら 「我身や塩平のただの物売りであります。夜も暮れておりますので、急いで宿に戻らねばなりません。御やぐみさ（恐縮）ですから、城へ入る事など出来ません。どうか

満名下庫理

「お許し下さい。」  
「やぐみさもするな、斟酌もするな。按司加那志前のご命令であるというのに、どうして断ることが出来ようか。急いで城内へ入りなさい。」

をなじやら

「按司加那志前のご命令であれば、お断りする訳にはいきません。恐れ多い事ですが、脇御門から入って一目按司加那志前を御拝み致しますよう。」

我瀬之子

「やあやあ、女よ。近く寄れ。話しをしようではないか。」

（夫人が按司の近くへ寄る↓太鼓打つ）

我瀬之子

「あゝ、近くで見れば、夢にまで見た乙鶴ではあるまいか。（我瀬は立ち上がった）誠に天のお助けか、神の引き合わせか。願っていた事が叶って、思っていた事が叶って、こんなに近くに乙鶴が座っているとは。あゝ、当時と変わらず顔立ちもよく、髪は長く整っていて、物売りである事が本当に勿体ない事よ。すぐに美ら衣を着せてあげよう。いくらでもご馳走を食べさせてあげよう。とう



とう、家臣達よ、今日は夜も更けているから、宴はここで締めくく  
ることにしよう。急いで立ち戻っ  
て内に入っておきなさい。」

（一同、一礼し、北表へ入羽）

我瀬之子（入羽しようとする真加那を引き止めて）

「とう、真加那。乙鶴に品格のあ  
る美味な御茶をご用意なさい。」

御茶当真加那

「拝み留めやべて」

我瀬之子

「やあ乙鶴よ。主人・米須按司は

先日遊舟の折りに不慮にして溺死  
され、本当に心苦しく、私も力及

ばず助け出せなかった事に深く後  
悔し、至極口惜しく残念に思い、  
毎日嘆き悲しんで暮らしている。  
今、あなたを見れば、可愛らしい  
娘を連れている。娘は父親を亡く  
して、深く悲しみに暮れ、あなた  
も夫を失って、さぞ心細い事であ  
ろう。今日からは、明日からは私  
の妻として共に生活すれば、お互  
いに楽しき人生となり、明るい将  
来が必ず待っている。もうこれか  
らは何も心配する事なく暮らして  
いけるのだよ。」

をなじやら

「やあ、按司加那志前。仰る通り、

私は夫を失って頼る方もおりません。このような身となって、自害しようかとも思いましたが、我が娘を見捨てる訳にいかず、どうか娘の為に生きていこうと決心し、世間の目を気にせずに、渡世の為にこのような物売りの賤しい仕事をしております。結婚という有り難き仕合わせは、この上ありません。」

（ここで北表より御茶を持った真加那が出羽）

をなじやら

「しかし、按司加那志前。米須按

我瀬之子

司が亡くなってから、まだ年忌の法要が済まぬ内に結婚するとは、米須に対し顔向けが出来ません。どうかもうしばらく待っていただけないでしょうか。」

「あゝ、まだ奴に思いがあるのか。死んだ者の事など考えるだけ無駄だ。もうお前は私の妻なのだ。」

をなじやら

「その様な事は認めておりません。米須のをなじやらであった身として直ぐに結婚する訳にはいきません。」

我瀬之子

「あゝ、米須、米須とうるさい。そんなに思い続けても米須はもうこの世にいないのだ。これ以上は

言うならお前も斬りつけてやろう。」  
（我瀬は刀の柄に手をかける↓太鼓を打つ）

御茶当真加那

「畏れながら按司加那志前、昔云言葉に『意地の出ぢらば手引け、手の出ぢらば意地引け』という諺があります。短気・腹立ちは怪我の基でありますから、どうか込み上げるお怒りを御押さえ下さい。」  
「いや、つい感情が込み上げてしまい済まなかった。死んだ者に嫉妬をしてしまうとは、私は愚か者よ。不調法至極、許しておくれ。」  
「私こそ按司加那志に逆らうよう  
をなじやら

な事を言ってしまい、申し訳ございません。急な事について気が動転してしまつて。しかしながら今のご様子を見ると、按司加那志は大変素直かつ純粋な御方でいらつしゃいます。私は喜んで結婚をお引き受け致しましょう。ただ一つお願いがございます。私は幸いな事に幼年から裕福な家庭で生まれ育ちました。その環境に慣れてしまい、このような穢らわしいぼろ屋に住む事はできません。そこで、我瀬岳の麓の見晴らしの美しい海の見える場所に、良質な椎や

櫛、チャージで立派な新しい御殿を構えていただきたいと思うのです。それまでは、結婚はお待ち下さい。その間に米須按司の三年忌法要も済んで、米須の祟りを被る事もないでしょう。どうかもうしばらく待っていただき、それから私とあなたと新たな夫婦生活を始めようではありませんか。」

我瀬之子

「あゝ、そのような話であれば私も納得がいく。互いに願った事が叶い、大変嬉しい限りである。あなたの言う新居造りは最も易き御望みだ。ならばすぐに普請の準備

をし、早速日を選び、材木選びに我瀬岳へ登る事にしよう。」

をなじやら

「あゝ尊と。ご理解いただけ、仕合わせに思います。」

御茶当真加那

「御二人が和睦なさって、大変嬉しく思います。これで此の御城も安泰となる事でしょう。され、をなじやらの前、おめなりべの前よ。唐から取り寄せた香片の御茶をじっくりとふかしてご用意致しました。今日の嘉例な日に茉莉花を浮かべております。」

（真加那は夫人と娘に御茶を差し上げる）

をなじやら

「果報しでありますよ、真加那。爽やかな御茶の香りが広がって、このような御茶は味わった事がありません。」

真樽

「母の言う通り、とても香り高く、美味であります。ぱっと花開く白い茉莉花は、まさに今日の喜びを表しているようです。」

（真加那が琉歌を書いた紙切れを、こっそりときやうきやこ持ちに手渡し、きやうきやこ持ちが密かに我瀬に手渡す↓我瀬が紙切れに書かれた文字を時々見ながら琉歌を詠む）

我瀬之子

「香片の御茶の 咲きよる清ら花に守り育てたる 母の思い」

をなじやら

「流石は島国に知られた按司加那志でございます。茉莉花を娘・真樽に見立て、御茶でこのような表現をなさり、深く感動しております。」

我瀬之子

「いやいや、これくらいの振る舞いは我が城の常である。これから心置きなく暮らすが良い。」

真樽

「情緒ある御茶に私も感激しております。深く感謝申し上げます。」

をなじやら

「さて、按司加那志前、来る十五日吉日の巳の刻に、我瀬岳の麓で待っていて下さい。新しい御殿の

我瀬之子

木材選びにご一緒致しましょう。」  
「待て、待て。折角、今日出逢えたのだから、そんなに急いで戻る事もないではないか。御茶一杯だけでは縁起が悪いから、今日は茶菓を味わいつつ夜が明けるまでも語り合おうぞ。さあ、真樽も揃って勝手（御内原）へ入り、語り明かそう。」

《さあさあ節》（四人は北表へ入羽）

急ぎ戻りたい やても城内に またも荒波の立たぬ如に

第四場間の者

《オメヤカラ（海ヤカラ）節》（間之者が橋懸りより權を持って出羽）

- 一、まこと世替わりに 風水まで廃れ 作る稲粟も 実りないらぬ
- 二、今度按司添や 政治持ち知らぬ 御身分に驕れ 悪事あまた
- 三、幾月も経ちやり 今時分なれば 米須元臣下 戻て着きよさ

間之者

「是や此の村の漁師・次郎である。近頃、米須村一帯は情勢が思わしくなく、民百姓も苦しんでおります。以前米須世之按司がいらつ

しゃった頃は、作る毛作りも万作になって、魚の数々も溢れるほどいましたが、按司が我瀬之子という逆臣に殺されてからは、民百姓の生活は苦しく、税金も重くなり、農作物も一向に実る事はありません。浜で漁をしようとすれば潮巻き棒の様な渦を描いて、波風が立ちはじめ、畑に入ればハブが現れ、はあ、思うように仕事が進む事はありません。しかし、この前福地大主が久しぶりに此の村に戻っていらして米須世之按司の墓普請をするといつて、石大工を雇ってお

りました。私の妻も先日、墓大工に硯水の差し入れをしたところで。また、不思議な事に同じ頃、按司のをなじやらの前が我瀬按司の城元を通つて、按司に見つかり呼び止められて、『妻になれ』と言い寄られ、ついに乱暴な我瀬按司は『まだ米須を思い続けるのなら、お前を斬りつけてやろう』と。それから話を続けるうち、事もあろうに夫人は結婚を受け入れたようです。はあ、一大事な事だう。しかし、をなじやらの前も頭のきれるお方ですから、直ぐには結婚

しないでしよう。今日は我瀬按司とをなじやらの前の新しき御殿の御材木選びに、二人が我瀬岳に登るとの沙汰でございます。しかし、かつての米須世之按司の御側いらした方々がこうして一度に戻って来られるのは、何かの始まりを告げているのでしょうか。いつかは此の村に以前のような世果報をもたらしてはくれないかと切に願っているのですが。兎にも角にも、変わった事ばかりで甚と恐ろしいですから、急いで宿に戻る事と致しましょう。」

《三線列弾》（ジャンジャンの音とともに間の者は北表へ入羽）

第五場 御材木選び・夫人と娘の仇討ち

《道輪口説》（我瀬と夫人、娘は橋懸りより出羽・舞台一周）  
（我瀬は金色の塵を手にして、夫人と娘は我瀬の後に続く）

一、声は出ずとも 口説いてみませう さらば東西 静まり給へ

二、今度御殿の 御普請召さる そこで御材木

三、引く事じゃるが 引けと御意でも 下りはせぬに

四、貴賤老若 心あはせて 我とすすみて



五、進む太鼓は 鳴神どのか 空を響かす

六、木遣の囃し 椎の大角 檜の木丸太 ゑいと  
引き上ぐ

我瀬之子

「とうとう、我瀬岳中腹まで着く  
ことができた。木々は青々とたく  
ましく育ち、まるで我々の新たな  
生活を後押ししてくれているよう  
だ。私は寝ても覚めても乙鶴の事  
ばかり考え思い焦がれて、一日が  
過ぎるのも千秋を経るが如し。よ  
うやく待ち兼ねていた約束の今

日、乙鶴に会えた事がとても嬉し  
き事よ。私は新しい御殿が建つ  
のを待ちきれずに昨日、臣下達と共  
に木を選び、少しは運ばせておい  
た所である。」

をなじやら

「やあ、按司加那志前よ。お選び  
になった材木は、細すぎて使い物  
になりません。木の寸法を測る時  
は天（上）を見上げて高さを測り、  
両手で木を抱いて太さを測り、そ  
れで良い木か否かを見極めるので  
すよ。又、木選びには余分に供  
どもを連れて行く必要はありません  
ん。私が御一緒しているのですから。」

我瀬之子

「あゝ、あにい、あにい。それでは、今日選んだものを後日家臣達に運ばせて、それを使う事にしよう。」

をなじやら

「され、按司加那志。今日は酒肴をご用意致しました。木選びの前に、この山の悪風を祓い、景気をつける為に、先ず御酒を差し上げましょう。」

我瀬之子

「あゝ、なんと気の利く方よ。普段はあまり酒を呑まない私であるが、今日の喜ばしい日に一つ頂く事にしよう。」

（三人は座って、夫人と娘が御酒の用意をする）

をなじやら

「され、御酒を一つ差し上げましょう。」

我瀬之子

「一つ注げ。」

我瀬之子

「あゝ、九月の御酒は菊の葉を浮かべて、味と香りともに素晴らしい。またも注がに。」

真樽

「では、娘の私から心を込めて差し上げましょう。」

我瀬之子

「とう、美味しいお酒に酔いしれて夢心地である。さらば今日の嬉しさに木選びを始めるとしよう。」

《坂原口説》

（我瀬は微酔い気分で木々を見て、木材選びを始める）

エイエイ 鶴と亀との 齢にこなべ 千代に君が代 みやで（じ）  
引く

我瀬之子 「あゝ、材木に出来そうな立派な

木がある。尺を測ってみよう。」

（我瀬は大木を両手で抱いて、太さを測る）

（舞台紅型幕の上方より神仏・愛宕権現がゆっくりと降りてくる）

《坂原口説（一番に続けて）》

エイエイ 愛宕参りに 袖を引かれた これも愛宕の 御利生かな

をなじやら・真樽 「憎き我瀬、夫の仇を今こそ取ろう」

（夫人と娘は隠し持っていた鑿を我瀬に向けて追いかける）

《三線列弾》（ジャンジャンの音とともに我瀬、夫人・娘は橋懸りより  
入羽）

第六場 按司墓の完成・我瀬の亡霊出現・踊て戻ら

《大主手事》（福地大主が橋懸りより出羽）

福地大主 「米須按司のをなじやらの前・お

めなりべの前が君親の仇を見事討  
ち取ったという朗報を聞いて、大  
いに喜び、安心致しております。

早くお二人を御迎えして事実を確  
かめたい心持ちであります。をな  
じやらの前の命を受けて、見晴ら

しも良く、山を背にした風水の大  
変良い場所に按司墓を建てて、こ  
の程完成する事が出来ました。『先  
原に出ちて草たとて見れば花咲  
かち美らさ森や静か』今日は佳  
かる日でありますので、海山の幸、  
豚や鶏、海老・蟹・浅蜆の料理に  
加え、餅の御重、御菓子、書道用  
具一式を揃え、按司墓落成の御祝  
をしようと思えます。急いでをな  
じやらの前にこの事を知らせて、  
このような造りでよろしいか見て  
いただきたく思う次第であります。  
され、をなじやらの前、され、お

めなりべの前。」

（夫人と娘が橋懸りより出羽）

をなじやら

「やあ、大主。」

福地大主

「され、をなじやらの前、おめな  
りべの前よ。ご無事で何より、夢  
のようでございます。仇討ちの件  
は如何でしたでしょうか。」

をなじやら

「片時も忘れる事の出来なかつた  
君親の敵仇。長きに渡る願いで  
あつた憎き我瀬の仇討ちをこの手  
で成し遂げる事ができました。こ  
れもあなたが仇討ちの方法を考

福地大主

え、教えてくれたおかげです。この御恩は言っても言い尽くされぬ程でございます。これですごし按司添も安心している事でしょう。」「本来なら私たちが臣下が君親の為、をなじやら・おめなりべの前の為にと仇討ちをする筈であるのに、をなじやら・おめなりべの前の強いお志に圧倒されて、私はお二人の勇気ある行動に頭が上がりません。無事仇討ちを果たしていただき、大変喜ばしい限りです。をなじやらの前とおめなりべの前の命振り捨てて仇討ちを果たす御姿は

真樽

誠に末代の手本として沙汰に残る事でしょう。」「

「仇討ちの際、天の神々が降臨されたように感じ、おかげで無事に成し遂げる事ができました。きつとすぎし親ふじの光に守られていた事だと思えます。この御恩尊さは言い尽くせない程であります。ところで、福地大主よ。父親の墓普請の件はどうなりましたか。」「

福地大主

「はい。無事に完成する事が出来ました。どうぞ新しいお墓をご確認下さい。御墓落成（開眼）の御儀式を執り行いましょう。」「

をなじやら

「美拝であります、福地大主。この御恩尊さは海山よりも深い程です。待ちに待った按司の御墓が完成した事は大変喜ばしい事であります。とうとう、案内を頼みましょう。」

〔夫人・娘・福地が舞台を一周〕

福地大主

「こちらでございます。」

をなじやら

「あゝ、尊と。『御門見れば香さ

内入れば勝てだんぢよ按司の前  
の 誇りみしえる』 墓の御門も  
立派に造られています。中に入っ  
て近寄ってみるのは、心が弾むば

福地大主

かりです。」

「され、をなじやらの前。向こう  
側に季節はずれの梅の花が美しく  
咲き誇っております。私はその枝  
を一つ取って御供え用として持っ  
て参りますので、先に入って按司  
墓の出来をご確認下さい。」

〔福地は北表へ入羽〕

〔をなじやら・娘は前に進んで、何かを感じ、目付をする↓不気味な笛の音〕

〔白装束に、能面「怪士」をつけた我瀬の怨霊が南表より出現〕

〔後見人は北表より柳と花を入れた籠を持ってくる〕

《柳節》〔夫人と娘の二人躍〕

（踊り始めの女基本立ちの時に、怨霊に向かって人差し指を差す／怨霊は打ち杖を持って舞い狂う）

柳は緑

花は紅（囃子「ユリテイク」で笛と太鼓が激しく鳴って、怨霊は南表へ退散）

人はただ（二人で相手の肩に手を当てる所作あり／ここで福地が梅の花を持って北表より出羽）情け

梅は匂い

最後の囃子：柳は風水清めて今日や按司君御供養ヨンナ

をなじやら

「やあやあ、立派な御墓を建てて

いただき、御墓の落成式も無事に

終えて感激しております。『土も

引き美らさ石も積み美らさ風水

真塚根の向きの美らさ』心配していた事も全て叶える事が出来、大変嬉しく思います。」

真樽

「やあ、母親よ。仇も討ち取って、

立派な御墓も建てて、今日の喜び

は物に譬える事が出来ません。押

し連れて互に踊って元の御城へ戻

りましょう。」

をなじやら

「とうとう、今日の誇らしやに踊

て戻ら」

福地大主

「お供しやべら。」

《やれこのしい節》（母子は籠を担ぎ、福地は母子の後方について、橋懸りへ入羽）

- 一、念願や叶て 墓普請済まし 風水からよたさ 元の城
- 二、母子二人揃て 仇討ち取たる 今日嬉しさに 誇て戻ら

完

## 凡例

### 一、組踊創作にあたって

本作品は失われつつある沖縄の伝承文化・風俗・信仰などを舞台上で残していきたいという思いから創作した。

本作品は、尚温王冊封（申の御冠船）の御膳進上時に上演されたと

いう記録のある幻の組踊「我数之子」とは、題材にした米須城の伝説は同じであるが、全く別の創作組踊であり、「我数之子」を再現したものではない。

本作品は、米須城（我瀬の子）の伝説と、古典女七踊りの一つ「柳躍」を軸に、伝説の舞台となっている糸満市地域や、組踊の本場・首里の民俗文化を随所に織り込み、完成させた。

### 二、台本の書き方

（ ）には、立方の動作や心情の表現、地謡の演奏、または補足事項を記している。

《 》には、演奏曲の題名を記し、それに続けて文語体で歌詞を記載している。

台詞は基本的に大和口（標準語）であるが、一部は島言葉（琉球語）



や組踊語で記している事もある。琉球語の表記は基本的に文語体である。なお、読み方は手書きの片仮名で附記する。  
組踊の題材で参考にした文献

『山内盛彬著作集第二巻』1993・3 山内盛彬 沖縄タイムス社  
『思出の沖縄』1956・2 新崎盛珍 新崎先生著書出版記念会

『南島民俗文化史料』1975・4 有川董重 沖縄郷土文化研究会  
ir.lib.u-ryukyuu.ac.jp:8080/ bitstream/123456789/2381/1/  
No7p1-25.pdf (『首里城の舞台に供された組踊と知られざる組踊』  
2001・3 池宮止治)